

5. MEPA (ムーブメント教育プログラムアセスメント)

ムーブメント教育の達成課題(からだづくりの課題)の達成度を把握し、指導の手掛りを得るため、小学部児童13名にMEPA (Movement Education Program Assessment)を実施し、次の3つの観点から処理をしてみた。

(1). プロフィール表による結果

プロフィール表は、月齢に於ける達成課題の達成の様子をグラフ化し、総合的な発達を検討する物である。

小学部児童13名のプロフィールを一つの表にまとめ、13名中11名通過の項目(通過率85%)の項目に斜線を引いたのが右の表である。

0%マシ

年齢	月齢	項目						
		1	2	3	4	5	6	7
7	61-72	1	3	4	5	6	7	8
		4	7	7	8	9	10	11
8	49-60	3	7	6	7	7	7	8
		5	8	8	8	8	8	8
5	37-48	3	4	6	7	7	7	8
		4	10	10	9	5	4	4
4	19-26	10	10	10	10	10	10	10
		8	8	8	8	8	8	8
3	13-18	10	10	10	10	10	10	10
		10	10	10	10	10	10	10
2	7-12	10	10	10	10	10	10	10
		10	10	10	10	10	10	10
1	0-6	10	10	10	10	10	10	10
		10	10	10	10	10	10	10
11	0%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	

(100%マシ)

(結果)

- 3ステージ(1才6月)迄は、殆ど通過し、4ステージ(3才)を充実する集団である。
- 4ステージも感覚・運動に関しては、ほぼ通過しているが、言語、社会性の通過率が低い。
- 6~7ステージ(5~6才)のグループがある。

(2). クロスインデックス表による結果 (■は、100%未達成の項目)

身体意識スキル、運動属性は、ムーブメント教育の達成課題の中でも重要である。これ等の手がかりを得るためのクロスインデックス表によって身体意識(運動・感覚、言語・社会)、調整力、筋力・持久力の得点率を調査した。

(結果)

(四項目得点率一覧の一部)

- 同発達年齢の健常児に比べ、筋力・持久力に劣る。
- 調整力に劣る。
- 身体意識の劣る子が多く、言葉の獲得に大きく影響している。

氏名	CA	重複障害名	身体意識		調整力	筋力・持久力
			運動・感覚	言語・社会		
K・K	6:9	自閉症	85	34	62	73
H・O	7:0	染色体異常	87	75	■	■
K・N	8:1	自閉症	87	78	■	■
T・M	8:4	ダウン症	55	50	65	68
K・O	8:7	てんかん	53	47	61	63

(得点率が75%以下を劣ると考えた。)

(3) . 得点一覧表による結果

達成課題の達成度の分野別に見た個人の特徴及び小学部13名の傾向を把握するため、結果を一覧にし、得点が18点（第5ステージ通過）以上の分野に斜線をしたのが次の表である。

〔結果〕

MEP A得点一覧表の一部

氏名	CA	運動・感覚			言語		社会性 対人関係
		姿勢	移動	技巧	受容	発出	
K・K	6:8	16	16	14	8	10	7
H・O	7:0	18	18	18	18	18	16
K・N	8:1	18	18	18	18	18	15
T・M	8:4	15	15	15	13	11	12
K・O	8:7	12	13	16	11	12	12
H・M	8:7	18	18	18	18	18	18
M・T	10:3	18	18	18	18	18	18
Y・W	10:4	18	18	18	18	18	18

- ①. 全体的に運動・感覚に比べて言語、社会性が劣る。
- ②. 同じような得点でも、暦年齢が違くと、日常の行動は違う。
- ③. 同じ暦年齢、得点でもひとり一人の日常の行動は違い、ひとり一人が個性的である。
- ④. 一見してグループが分かる。

(4) . MEP Aから考察される実態と指導の重点

以上、MEP Aの結果を三つの角度から考察した結果、次のことが言える。

- ①. 運動・感覚の4ステージを中心に学習を組み立てる。が、能力の高い児童のために、一つの道具で複数の課題を設定する工夫が大切である。
- ②. 4ステージから5ステージへの移行は、4ステージでの滑らかな身のこなしを基盤にする。同じ課題でも、より滑らかな、より正確なからだのこなしをめざしていく。
- ③. 運動・感覚に比べ、言語、社会性が劣っている。言語の力のよわさによって、からだのこなし方に滑らかさが欠けることが予想される。運動と併せながら、言葉を指導していくことが大切である。
- ④. 筋力・持久力に比べ、調整力に劣る。遊具等での遊びの経験不足を意味している。また、身体意識が全体に低い。身体像、身体図式を育てる運動を学習に多く取り入れると同時に、遊具でもっと遊ばせて、前庭覚、聴覚触覚等への揺さぶりをしていく必要がある。
- ⑤. 発達段階から考えて、1才6月～3才の幼児が示す、心理的、行動的特徴をふまえた指導の手だて（模倣、動きの援助、意欲的に取り組む目当ての持たせ方等）、教材教具の工夫が大切である。

以上、小学部の児童13名の傾向から、指導の重点を述べてきたが、指導に当たっては、ひとり一人の日常行動、暦年齢、障害、個性等、きめ細かく見つめながら指導していくことが大切である。